MyPage

石川県地域づくり推進協議会

VOL. 11
2002.11
情報誌

Contents

▼巻頭特集
「山で地域づくりを語る」
～熊本県小国町、大分県大山町訪問記～

▼交流とネットワーク
「第17回地域づくり団体
全国研修交流会 宮城大会」

▼地域づくり交流
「上山のひとびと」～山形県上山訪問記～
「自治体学会」(福島県郡山市)

▼地域レポート [新規参加団体紹介]
こだわりもんの会(輪島市)
曽々木青年会(輪島市)
能登麦屋おさよ会(輪島市)
馬場崎商店会(輪島市)
商都 Noto(能都町)
富来町商工会青年部(富来町)
さわやか「いいね金沢」河北支部(七塚町)
元気だすまい会・NUT(七塚町)
はづちを(加賀市)

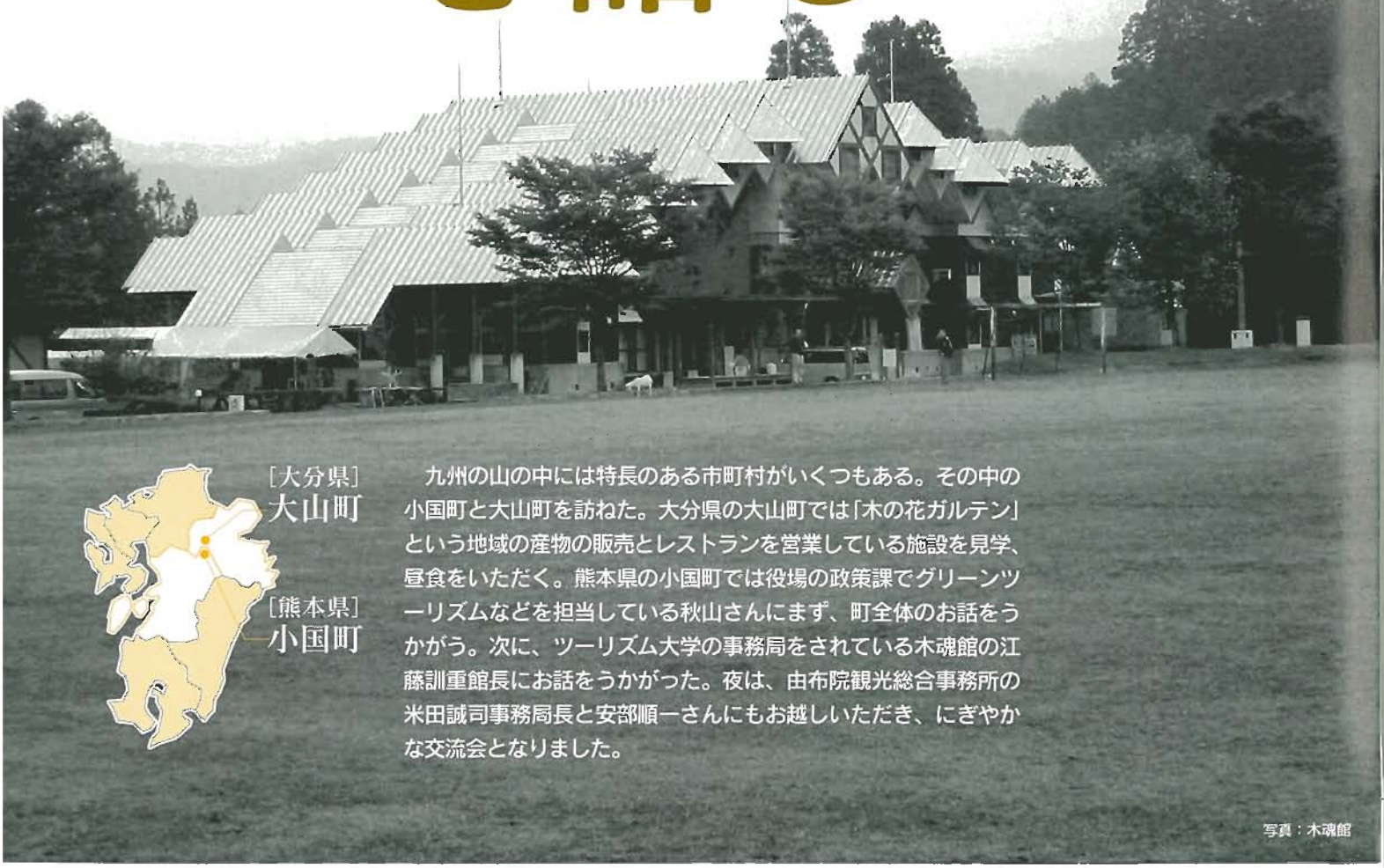
▼地域づくり実践講座
「曽々木編」(輪島市)
～物語性に溢れた曽々木に～

真っ白なところから
始めることも
必要かもしれない。
多くのことを積み過ぎて、
行き詰まっている
場合もある。
一度、あらゆる荷物を捨て、
原点にもどってみてもよい。
そのような純白の世界を
どこかに残しておきたい。

【shiro】

【巻頭特集】

山で地域づくりを語る



九州の山の中には特長のある市町村がいくつもある。その中の小国町と大山町を訪ねた。大分県の大山町では「木の花ガルテン」という地域の産物の販売とレストランを営業している施設を見学、昼食をいただく。熊本県の小国町では役場の政策課でグリーンツーリズムなどを担当している秋山さんにまず、町全体のお話をうかがう。次に、ツーリズム大学の事務局をされている木魂館の江藤訓重館長にお話をうかがった。夜は、由布院観光総合事務所の米田誠司事務局長と安部順一さんにもお越しいただき、にぎやかな交流会となりました。

写真：木魂館

ツーリズム大学から見えること

江藤訓重［熊本県小国町 木魂館(もっこんかん)館長］

［韓国から視察ラッシュ］

ツーリズム大学は実は今、韓国からも視察ラッシュに合ってます。韓国では今、グリーンツーリズムが国の施策として非常に盛んになってきているんですね。話を聞いていると、普通の農業大学に、ツーリズムのコースを新設していたり、地域ごとにツーリズム大学を作れということが、国策になってきているようです。「ふるさと創生」みたいに、かなりのお金が出ているみたいです。

今日も女性10人ぐらいのグループが来られ、ツーリズム大学1期生が隣の町でやっている農家民宿を見に行っていただきました。

「韓国にも来てくれ」と言われるんですが、行ったって言葉が分からないし、それぞれ地域資源や人を活かしていく話ですから、「韓国は韓国で作ってください」という話はしています。「できたら、お互い行き来しましょう」と。

私がいつも「彼らは素晴らしいなあ」、と感心するのは、日本の視察団だったら、向こうへ行って昼ごはんを「自分たちで作る」って言いませんよね。物価が5、6倍違うということもあるのかもしれませんが、この前来た人たちは、「地元の人たちとの交流を大切にしたい」と、昼食なんかも一緒に摂りましょうと、一緒にカレーライスなんかを作りまして、彼らは積極的に地域に入り込もうとしているのに、非常に感動しています。

［人のネットワークが役立った］

ツーリズム大学は元々、由布院で作ろうという話をしていたんですが、なぜか小国に来てしまいました。うちの宮崎町長はすごく目立ちたがり屋だから、すぐ「うちがやる」なんて言ったからでしょうけれど、手がけたのはいいけれども誰がやるとかもなくて、「じゃあ、ここにお願いします」と、うちが始めまして、もう6年目を迎えています。

中谷さんたちは由布院に作りたかったんですけれども、私たちのところにでき、暗中模索しながらやっていこうという中で、一番役に立ったのが、今までのネットワークです。

講師陣をどう呼ぶか。お金があるわけじゃないですから、安いお金でお願いしなくちゃいけない。大学の先生、実践してる人、地域づくりの方たちとかを講師陣として迎えることができたのは、今まで夜遅くまで酒を飲み続けた結果かな。

まちづくりってのは、目に見えないものが実は非常に大切。人とのつながりも、目に見えないものです。それがこのような形で生かされた。木魂館にそういったつながりがあるんじゃなくて、個人に付いてきてるものですね。そういうことがあって、ツーリズム大学は開校できた。

［異文化の出会い「サバキムチ」］

もう一つは、地域づくりインターンの会というのがありまして、うちは10年くらい前から寝るところと食べるところがあり、最初は建築の学生、その後、社会学とか都市計画とかいろんな学生が来るようになりました。そういった学生たちとの共同事業が始まってきた。今これは、国土交通省の地域づくりインターン事業というかたちで、農水省も同じようなことやってます。三大都市圏の学生を派遣する事業ですね。

国土交通省がその事業を始めるきっかけが、うちだったんで

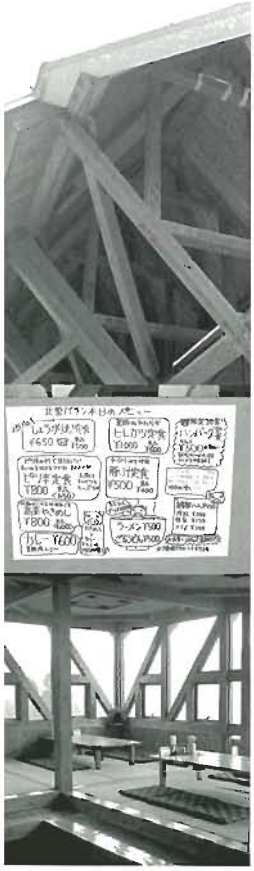
Report 1 「九州ツーリズム大学」 岡崎 善二［FMラジオで能登をひとつにする会］

グリーンツーリズムという言葉を聞いて、久しい時間が経ちましたが、じゃあその実態はというと、まだまだ身近にその事例を見聞きする訳でもありませんでした。

熊本県小国町の「九州グリーンツーリズム大学」のお話を事務局長の江藤訓重さんから伺ったのですが、都市と農村との交流を橋渡しする人材育成と情報発信を担うためにグリーンツーリズム大学を平成9年に発足したということです。参加者は、地元の方を始め、都市部の住民の方が年間28万円の受講料を払って講習を受けたり体験学習をするということです。講師陣も多彩ですが、何より、28万円の受講料を払ってまで参加するというのがすごいところです。

グリーンツーリズムは能登半島や白山を抱える石川県にも大変重要な考え方だと思いますが、既に何年も前からグリーンツーリズムを生かしていく方策を実践している小国町の先見性にはただただ、敬意を表するのみであります。

石川県は少し人材的にも、組織的対応にも立ち遅れているのではないのかと思った今回の取材でありました。



す。たまたま当時の役員の人がうちに来て、そのときに早稲田の学生が滞在していたんですね。それと福岡のある短大の先生、私の友だちなんですが、その方がいました。宮崎県の南郷村が「百済の里づくり」で韓国との交流をやってる関係で、国土交通省の人はうちに特産品のキムチを持ってきた。福岡の先生は、俺と一緒に飲む酒の肴にしようと、たまたま途中で、鯖の味噌煮を買ってきたんですよ。ここに、キムチとサバ缶ってのが揃ったんですね。「これ、混ぜたら美味しいんじゃないの」となって、これが美味しかったんですよ。「こういうことやな」、異質なものが交わる。これはいいなあ、と。これをサバキムチと言います。

で、そこに早稲田大学の学生がいたので、「お前なんで来てるんだ」、「実は地域づくりとかいろんなことを学びに来てる」。

そういう事業って、地域に対してもすごく刺激を与えるし、来た学生に対してもすごく農村の良さとかを感じ取ることができる。農村ってビンボーしてるかと思ったら、車を4台も5台も持ってたり、広い家に住んでいる。「お前、食え、食え」と、都会では考えられないけれど、ご馳走をどんどん出してくれる。すごくみんな優しい。あるいは山菜とかいろんなものを知ってるとか、感動することがいっぱいあるわけですね。

そういうことを、国としてもやらなくちゃいけないんじゃないか。大学で学ぶんじゃなくて。

「地域づくりは人が大事だ」と言われますが、農山村に専門性の高い人がいるかというと、いない。そういったこともあって、人を派遣しようと、サバキムチから国土交通省の地域づくりインターン事業が始まってきています。今年50名くらい学生が参加して、21の地域に派遣されています。農水省も同じことやって、その中で、東京工大の大川さんもそれで来て、小国の女性と結婚してしまいました。

[学生の力が大きかった]

今度はそういうOBたちが「インターンの会」というのを結成してまして、それもかなりいます。今、ニセコ、小国、由布院、それに山梨県の小菅村と早川町、愛知県の小金村、6ヶ所が組んでやっていて、うちと早稲田の理工学部にも事務局があって、2つでやっています。

この前、突然総務省から電話があって、「なんとかの表彰対象になりました」なんて言うんでびっくりしました。賞をもらえるって事は認知されるってことなので、まあいいかなと思っています。

そういったことで、いろんな分野の学生が集まり始めた。やっぱり、寝るところと食うところがあるってことですね。寝食を安く、っていうかほとんどこちらが提供してやってきたんですけれども、ツーリズム大学のカリキュラムを作るときに、彼らの力は非常に大きかったですね。

[徐々に都市住民が増えた]

どうなるか分からなかったんですが、日本人は大学が好きなんでしょうね。ツーリズム塾っていう名前だったら、誰も来なかったと思います。定員40名ですけれども結構応募があって、56人入学しました。

1期生は、農村と都市に住む人が半々くらいでしたね。農家民宿をやってみたいという気持ちがすごく強い人たちが多く、平均年齢が50歳くらいでした。2期生になるとどんどん変わっていくんです。都市住民が増えてきました。

今、5期が終わった段階で、全課受けた卒業生、好きなところをつまみ食いした修了生、合わせて707名です。そのうち10%は九州を中心に、農家民宿・農家レストランなど、農業ビジネスをやっています。20%は行政の方ですね。グリーンツーリズムをどういう風にやっていったらいいか、と学びに来るんですね。あと、地元が10%くらいかな。それに、何かわからんけど来てみようという人たちが10%くらい。それと、将来農山村に移住しての交流ビジネスを考えている人が、結構いる。30%くらいいると思います。あとは学生が多いですし、生きがい探し、人生を変えてみたいという方が結構いらっしゃいます。そういう人たちで成り立っています。

研修棟

［若者の多さが地域づくりとの違い］

最近多いのが、農山村で移住して何かやりたいと思っている人たちです。小国に移住してくる人たちが結構います。

年齢はどんどん下がってきています。私たちが地域づくり関係の塾をやっていたときは、おじさんたちばっかりで、若い人はいなかった。唾を吐きかけながらの夜鍋談議、これがいいなあという気がしていたんですが、おそらく「地域づくり」というキーワードでは、共有できるものがなかったんではないか。ところがツーリズムになってくると、都市と農村というキーワードが出てくるわけですよ。農村だけの問題じゃない。都市側だけの問題じゃない。私たちもいろんな塾とかも経験してきた中で、「ツーリズム大学ほど面白いものはないね」と。

18歳から78歳くらいまでの幅広い、いろんな業種の人たちがいます。そういう意味で、本当の大学の姿です。ある一定層ではなくて、いろんな経験をしてきた人たちが学びの場に集まってくるという意味で、日本の大学よりアメリカの大学のようだと思います。

21世紀になって、「九州ツーリズム21世紀」と名前を変えました。これは、農政サイドから補助金をもらってるので名前を変えないと補助金がもらえそうになかったためで、中身は変わっていません。

［農家民宿・レストランの実施例］

では、ツーリズム大学があって、グリーンツーリズムとか農家民宿が何軒できたか。5つほどあるんですよ。大根農家とかいった大型の重量野菜を作ってる人たちが、息子さんの代に替わるときに、重量野菜で儲けた金で民宿をやっていくというのは結構あるんです。そうじゃなくて農家もやりながら民宿をやっているというのは、今のところないですね。やりたいと言う人は結構います。

農家レストランは、純粋な農家レストランが2軒ありますね。私の友だちの酪農家もいます。酪農やってるときは、息子は帰ってこん言うとったんですが、呼び戻したみたいですね。ばあちゃんも牛の餌に埋もれとったのが、レストランを始めたら、70いくつになっても60代にしか見えん。非常に変わりましたね。子ども呼び戻して企業体としては大きくなるし、牛を朝放牧したりすると、「牛かわいいね」ということでやってくる。ジャージー牛のこどもなんて、バンビちゃんですからね。

今日、韓国の方をお連れした農家民宿は、1年間に700人くらいの人が泊まっているんですね。九州で一位、二位の農家民宿です。二部屋しかないんですけれども、毎日泊まっている。

［地域の希望とのギャップ］

要は、小国に「やりたい」という人はたくさんいる。けれど、何か違うんじゃないか。各地区集落の人たちの話を聞くべきではないかな。

グリーンツーリズムというものが地域にとって良いと思っていたのが、地域を見るとすごく衰退している。この薬を飲ませるとよくなると思って、無理やり飲ませていたんじゃないか、と気が付いた。飲みたいという気持ちにならない限り飲ませた

Report 2 「ツーリズム」で「地域づくり」を再考

赤須 治郎［コーディネーター］

「地域づくりというキーワードでは（都市と農村で）交流できるものがなかった」と木魂館の江藤さんは語られた。ツーリズム大学の卒業生、修了生は７００人。地域づくりに代わるこれからのキーワードは「ツーリズム」や「交流」なのだろうか。

木魂館で夜鍋談議をしていたら、江藤さんが「ちょっと留守にします」と飛び出して行き、１時間くらいして、若いスタッフ数名と一緒に帰ってきた。何かトラブルがあり、みんなで相談していたようなのだ。このフットワークの軽さ。江藤さんを慕って東京の大学生が働きに来るのも納得できる。人生に大きな影響を与えるのは人との出会いである。

村おこし、まちづくり、地域づくりと、我々の活動の呼び名は変化してきた。総合的な取り組みを指した「地域づくり」は、今となってはコンセプトが曖昧になっている。そのため、地域づくりの若い担い手には、意味が伝わらず、魅力がないのかもしれない。人を動かす魅力的な「なにか」が必要である。私は言葉を探してみようと考えている。

って一緒だ。集落の中に入って同じ目線で考えなくてはならない。その時に協力してもらったのが学生たちです。私たちが行って話を聞いても、どうも本当のことを言ってないんじゃないか。学生が聞き取り調査をやっていくと、孫が帰ってきたようで、「何でも言ってやろう」とみんなが夢を語ってくれるんですね。若者が入ることによって、地域がすごく明るくなってくる。面白いですね、これはね。

それをまとめると、集落にとって何が必要かが見えてくる。みんなが農家民宿やりたいとは思っていないけれど、このままだと自分の代で農業が終わるから、「何か外の人とつながり持たなきゃいけない」というのは思っているんですよ。

［地域による違いを生かす］

昨年くらいから変わってきた状況は、漠然と「グリーンツーリズム」といってたのが、テーマを持ちはじめました。都市住民が農村に来て余暇を過ごすだけじゃなく、たとえば総合的な学習の時間などの教育的なものが出てくるんですね。教育ツーリズム、自然学校みたいになっていく。あとは、福祉も可能じゃないか。また受け入れる方も各地区によって違うんですね。

この前行った集落は、たまたま利害関係が多くて基盤整備ができなかった。そのことが今すごく良いんです。ドジョウがいたりするんです。水路がコンクリートだと生活できないんですね。よく見たらタニシも沢ガニもいる。生き物が身近かに見られるということは、子どもたちを連れてくればいいんじゃないか、と子どもたちとの交流をこの集落でやってみよう、となる。あるいは、地域の料理で「1日農家レストラン」をやる。

地区ごとに自発的なやり方というか、テーマを持ち始めたと思います。

［合併を控えた地域の自立］

これをどうやって繋げていくか。私たちはその役割を担っていると思います。ある集落は、合併を控えて集落の機能が落ちていくかもしれない。今より悲惨な状況になるかもしれないけれども、今のうちに集落一つ一つに、何かきっかけを作っておけば、自立していける道があるかもしれません。そのきっかけを作り、より良き人を交流人として派遣するような機能は、どこに行ってもないんじゃないか。

そういうことから、小国ネットワークビューローを今からやろうとしています。農水省に企画出したら通っちゃって。

［ツーリズムの担い手］

環境教育についても、環境問題をどうのじゃなくて、子どもたちに身近な自然に触れてもらうことが一番です。小国自然学校というのも開校しています。これは結構早くって、今、九州山の自然学校ということでやっています。

うちも大学ですから、附属の幼稚園と小学校があるわけですね。「トンボの学校」が小学生、「ドングリの学校」が未就学児童です。

今年、大学院を作ったんです。農業土木、交通、アジアの民俗学の話など1週間、朝の9時から夜11時まで。実は経営を考えると、やはり今の大学と一緒です。大学院を作って卒業生を再教育するっていう風にした方が効率良いんですよ。中高生は、受験というものがあるので難しいですね。

現在いるスタッフはツーリズム大学4期生。20代から30代の女性たちが、どうも環境、観光、交流事業など、日本のいろんな問題に対する感覚が良いですね。彼女たちはいろんな意味で、小国に住みながら福岡に住んでいる、ということを平気でやっている。もちろん別荘持っているとかいう意味じゃなく、地域を使い分けていますね。

北里バラン

住んでる人が楽しく暮らす町

秋吉祥志 ［熊本県小国町 政策課］

［林業から雪の里づくりへ］

役場に入って18年目、実はUターン組です。町長の宮崎が昭和58年に初当選後、職員の採用が60年度に初めてあって、その第1期生です。宮崎町長に洗脳されている職員の第1発目です。

町の特徴は、ご覧の通り杉の木しかない。木材で食ってた歴史が長かったんです。「現金持つくらいだったら、山を買え。お金は増えないけれど、山は木が育てば育つほど財産価値が上がる」という長い時代を過ごして、非常な山持ちも多いです。

それが昭和40年代からどんどん傾いていく。山の価値もなくなって、人もいなくなる。そんな中、宮崎町長の当選3年後に「雪の里づくり」という地域づくりが動き出します。

これは簡単に言えば、「住んでる人がいかに楽しく暮らす町を作るか」なんですね。それまでは、日本全国の他の町と同じように、過疎が進むことに対してどう歯止めをかけるかを一所懸命やってきたわけです。ところが実際問題、こんな山の中で、就職するところがない。出て行くのは仕方がないことなんですね。だから歯止めをかけるより、住んでる自分たちが、いかに楽しく豊かに暮らしていくかに力を入れようということが、大きな柱になっています。

ゆうステーション

［木造のゆうステーション］

その実現のためにさまざまなことをするわけですが、小国を有名にしたのが木造建築です。福岡空港から、昔は3時間、熊本市内へ行くのもバスで2時間とかいう辺鄙なところでしたので、ものすごく閉塞的だったんですね。方向転換を図るときに大事だったのは、やっぱり刺激を受けるということです。

自分たちで考える範囲って決まっているから、新しい方向は見えないんですね。そのときに木造建築というものが、大きな鍵になったわけです。

その中で、ゆうステーションというガラス張りの木造の施設があるんです。今、道の駅に指定されています。元々はあそこは何もなく、田んぼの中に突然UFOが降り立ったみたいにどーんとあったんですね。それがニュースやマスコミで取り上げられて、見た人が「小国町には変わった建物がある」と訪れたわけです。不便で何もないところだと思っていたのが、あの建物ができたことによって、たくさんの人が来るようになった。

どこの田舎でも、ネクタイした人が一人歩いてたら「あいつ何者だ、何しに来た」ということで怪しいんですが、100人、

グリーンツーリズムガイド

Report 3 「地域ごとのユタカサ」 吉村 未紀子［そい］

この二日間のキーワードは「地域ごとのユタカサ」と「つながり」、「人」である。ひとつの成功のモデルを日本中一斉に追い求める時代は終わった。その土地ごと、地域にある資源と、流れている時間と、培われてきた生活文化を出発点に、自分たちが日々「ユタカサ」を実感できる社会の仕組みを、各地域ごとに積み上げていく。「ユタカ」の中身は自分たちが考える。そんなアプローチの仕方が、小国にはあった。20世紀型の価値観や社会の仕組み、経済のあり方は、世紀の壁をすんなり越えることはなかった。が、20世紀を脱皮しきれずにもがいている現在の日本。各地に点在する明るい底力をもった地域が、皮を脱ぎ捨てようとしている。そして、そういう地域の魅力的な人々は、同じ匂いのする人間たちと地域の枠を越えて次々とリンクし、交流し、応援し合い、さらに新しいユタカさへの確実な一歩を踏み出そうとしている。結局煎じ詰めれば、人の魅力である。思いを持った人同士が結び合い、新しい動きをつむぎだしていく。いかに地域に魅力人を増やしていくか。これが究極の課題だ。…魅力的な人に会い、その人たちの動きを見る、魂を感じる。それが確実な道か。

小国ドーム

200人単位で来たら受け入れざるを得ない。そうして交流が進む中で、よそから見た小国町という情報が入ってくる。自分たちの住んでる町を客観的な情報で見られるようになっていき、「そうまんざらでもないんじゃないか」「何かやれるんじゃないか」という期待感が生まれてきた。一つの効果ですね。

［地域づくりの人材育成］

町長がやってきた中で、木造建築を介して刺激を受けるという部分と、人材育成っていう面があるわけで、21世紀小国未来塾という塾を立ち上げました。当初の塾長は町長で、町内で地域づくりに先進的に取り組もうという人たちを集めて3年ほどやりました。これは最終的に解散になります。なぜかというと、一人一人地域づくりに対する姿勢や考え方が違ってくるわけですね。一つの大きな目標を掲げても、達成するプロセスはみんな違ってきて、十把一絡げで同じ方向を向かせるのは無理な話なんです。「住みよい小国町を作る」という大きな目標の下に各個人が活動していけばいいじゃないかという考え方に到って、発展的解散をします。個性を大事にするという考え方が定着し始めた時期ではないかと思います。

町の主役は住民ですから、住民に「自分たちの住んでいる地域をいかに理解させるか」が必要になってくるわけです。平成2年から、各大字ごとに土地利用計画チームというものを設立します。当然行政主導で作られたものですが、小国町は、元々6つの村が合併してできたという経緯があり、町制になった後も6つの協議会が役割を担って存在しているんです。これは住民たちが自分たちで自分たちの財産を管理していこうという組織なので、固い結束もありますし、行政よりも強い組織なんです。この組織を利用して土地計画チームを作りました。

［子どもたちの時代に向けて］

要するに、これから先の小国町をあなたたちはどう考えますか、というのを考えてもらったんです。あなたの子ども、孫の時代に、どういう集落を残していきたいかということです。

それには、財産権なども関係しますから、「何、人の土地いじってんだ！」となるわけですが、実現するしないではなくて、夢を描こうじゃないかということで、コンセプトは「人様の土地に夢を描こう」でした。

具体的に動かすのはなかなか難しいわけですが、せっかく作ったんだから、何かやろうじゃないかと始めたのが、お祭りです。イベントってのは非常にとっかかりやすいし、同意も得られやすいので、各大字ごとにお祭りを始めました。もう十回目を迎えたところもあります。

今、また原点に戻ろうと考えています。ひとつは合併問題が控えてきた。合併を議論するときに、権力でやっちゃうと集落が振り回されちゃう。首長が代わるごとに地域の施策が変わってしまうようではよくない。もう一回土地利用計画チームを原点に戻して、将来の地域づくりっていうものを、しっかり考えてもらおうと思っております。

ニセコが作っておられる"まちづくり基本条例"のようなものをうちの町も作っていって、住民自治がしっかりできるようなシステムを整えていかなければいけないな、と思っています。

小国町役場

山で地域づくりを語る 巻頭特集

［熊本県］小国町

Report 4 番外編 「由布院・亀の井別荘」 坂下 利久［輪島市役所総務部企画課］

今回の直接の目的地ではなかったが、由布院に寄らないわけにはいかない。とくに輪島市の地域づくりの観点に大切である。コーディネーターの皆さんとの同行により、かの中谷健太郎さんと同席の栄を得た。

街中の賑わいを離れ亀の井別荘で中庭を眺めながら、中谷さんと昼食を共にして感じたことは、上品な空間の価値。中谷さんは由布院映画祭に新たな構想を持っておいでるようであった。

町並み整備事業もなく、歩道を設ける幅もない。聞けば通りの一般住民と出店者とは意見の対立もあるという。それで歩行者天国等にもなっていない。通りは狭く、車の交差はどちらかが路肩に停車しないとできない。でも、道が広ければいいというものでもない。川の水は綺麗であった。奥まった静けさと途中の賑わいは、それぞれの価値を果たしている。しかし奥まった金鱗湖周辺に、調和を乱すと思われる施設が立地した。今回は金鱗湖から駅までの２０～３０分の間を垣間見ただけである。

かって中谷さんは輪島の文化会館で講演をしたことがある。このとき「上質なもてなしをなんとしても維持したい。４～５軒の旅館はそのために必死で頑張る」と言っていた。これが由布院の吸引力であろう。

「運が良ければ綺麗な夕陽が見えますよ。それまでシャンパンでも傾けて待ちましょう、また次の日も待ちましょう」との言葉が印象に残る。

木の花ガルテン「オーガニック農園」

Report 5　岡崎 善二［FMラジオで能登をひとつにする会］

最初の取材地であった大山町の農家レストラン「オーガニック農園」を訪れて驚いたのは、平日にもかかわらず、次から次へと来店するお客さんの多さでした。

近年、輸入産品の野菜とか牛肉などの食品の安全性が取りざたされている中、有機栽培や減農薬といった健康志向でこだわりの食材が人気を集めているということが新聞やテレビでも良く報道されているところですが、あまりにも絵に描いたようなレストランへの入込み客数を見て、本当に商売に繋げて成功を収めているところがあるのだなと実感したところです。

「オーガニック農園」では、一人、1,200円を払って、約100種類の惣菜の中からバイキング方式で食事をするというものですが、私みたいに田舎育ちの者には、なんと言いますか、有態に言えば、芋の煮っころがしとかなすを炒めたものとか煮しめとか、まあ、毎日食しているものが並んでいるだけのような気がしない訳でもありませんでした。

もちろん、大山町は「梅、栗を植えてハワイへ行こう」というキャッチフレーズで有名になった町でもあるところから、町や農協といったところが戦略的に取り組んでいるのは間違いないところだと思いますが。

直売場店内

いろんな野菜が売られている

Report 6　角谷 明美［まれびとビア懇話会］

種類が豊富なため、すべてのメニューをたいらげることは不可能に近い。ということは、次に来る楽しみがあるということである。また、体調や空腹状態によってどう考えても1,200円分の食事ができなかった人は、「次は1,200円以上に食べるぞ～！」と次回への闘志を燃やすはずである。これが、種類が豊富で大きなお腹もたっぷり満たせる「百のご馳走バイキング」のマジックと見た。

ファミリーからバスで乗り付ける大グループまでお客さんは次から次へと入ってくる。空いたテーブルの片付けが終わらないうちに席が埋まっていくという人気ぶりで、圧倒的に女性が多い。その割にフロアスタッフの数は少ないのは、やはりバイキングだからである。お客様をテーブルへご案内した後は、空いたテーブルの片付けと、料理の補充に目を配ればいいのである。料金も先にいただいているので、追加注文がなければ、あとは自由に食べて自由にお帰りください、という訳だ。大勢の客が押し寄せても厨房はあまり驚かないだろうし、やっぱりバイキングっていいかも。

ただ、味付けはなんとなくどれも似ているような気がした。地元の定番料理といった感じなので、こんな食べ方もあるのねという新しい発見や目新しいメニューは少ない。また、素材そのものの味を楽しめる料理が少なく、煮たり焼いたり揚げたりと、ずいぶん火が通ったものが多かったのも残念だった。もう少し生に近い状態で新鮮な野菜を食べたかったなぁ。

それにしても70～80種類のバイキングは選ぶ楽しみがあって嬉しいものである。自分のお腹と相談しながら量を調節できるから残飯の量も少ないはずである。生ゴミは肥料として再利用しているのかしら。だとすれば環境にもやさしいレストランだ。自分んちの野菜でこんなにたくさんのメニューが作れ、しかも人を幸せな気分にしてあげることができて、しかも結構儲かってるみたいだし、農家も楽しそうっていう気持ちにさせてくれるレストランだった。

交流とネットワーク

内から外へ

第17回 地域づくり団体全国研修交流会［宮城大会］

会　期◎平成14年8月30日［金］・31日［土］
基調テーマ◎かくありたい　仕掛人たちの明日（みらい）づくり
会　場◎宮城大学、宮城県内14市町村

第7石巻分科会　「夢のあるまちづくり」五田 秀綱［柳田村当目公民館］

今大会のテーマは「"かくありたい" ― 仕掛け人たちの明日づくり―」です。"かくありたい"は、仙台藩の開祖・伊達政宗が幼少の頃、不動明王をみて言った言葉です。理想（明日の姿）に近づこうとする決意を表しているのでしょう。

開催地である宮城県はNPO活動が盛んな地らしく、宮城大学での全体研修会ではステージの袖で手話通訳と要約筆記通訳のボランティアが行われていて、これからの社会のあり方を垣間見た思いがしました。

分科会は各地域に分かれて行われました。実際に現地を見ることができて良いものの、その代わりに移動時間がかかり分科会の時間は圧縮されます。最も遠い所では２時間近くかかるそうです。

私が選んだのは石巻分科会。宮城県出身のマンガ家・石ノ森章太郎氏の作品を紹介する「石ノ森萬画館」を建設し、マンガを活かした夢のある街づくりを推進しています。私が住む柳田村には「猿鬼伝説」があり、猿鬼くんのキャラクターは奥能登出身のマンガ家・永井豪先生にデザインしていただいています。石巻市を選んだのはそんな理由からでした。

発表者は、前の石巻ＪＣ理事長・松本鉄幹氏です。

マンガを活かした夢のある街づくりは、石巻市長と石ノ森章太郎氏との懇談が発端です。石ノ森氏は石巻市の出身ではありませんが、高校時代に映画を見るため、生家から50キロ程離れた石巻市へ自転車でよく通ったそうです。そして、そんな想い出多い街のために何か役に立ちたいと考えていたそうです。

「石ノ森萬画館」は、市と市民が３千万円ずつ出資している第三セクターが管理しています。

市の構想は「人づくり」「まちづくり」「産業づくり」を３本柱にしています。マンガの魅力で若い優秀な人材を誘致し、それにより新しい産業を産み経済を活性化させ情報発信する。そしてその事が街の個性化につながり、更に人を引きつける。このような好循環を目指しています。

マンガを素材に選んだ事に対する市民のコンセンサスを尋ねたところ、まだまだ得られているとは言えないという回答でした。しかし、賛同して名刺にマンガを印刷してくれる企業も少なくないそうです。

また、柔軟性や創造性豊かな子ども達を育てるため教育にも活用したいという事で、教育委員会や学校長に対してアドバイスや情報提供をしているものの、教師の主体性に任せているため今のところ目立った取り組みはなされてません。

翌日は「石巻マンガロード」と「石ノ森萬画館」を視察しました。

「石巻マンガロード」は、石巻駅から「石ノ森萬画館」までの約１キロを整備したもので、所々に石ノ森氏のキャラクターがモニュメントになっています。鳥取県境港市の「水木しげるロード」を真似た発想です。お堅い交番の正面に「ロボット刑事Ｋ」が描かれていたのには感激してしまいました。萬画館には駐車場が無いため、途中の商店街に契約駐車場が何ヶ所もありました。商店街にも経済効果を及ぼそうという狙いです。

萬画館の入口に向かうコンクリートの壁面には、現代日本を代表するマンガ家29人の手形があり、永井豪先生のものも見つける事ができました。館内の女性職員はサイボーグ003のコスチュームで、自販機や公用車にも石ノ森キャラがふんだんに使われていました。

石ノ森氏に対し、奥能登出身・永井豪先生も決して引けを取るものではありません。奥能登の自治体が心を１つにし智恵を出し合えば、必ずこれに負けない個性的な空間が創れるはずです。単に、どこかの目抜き通りにキャラクターをちりばめるのではなく・・・。

市町村合併を契機にして、マンガで奥能登全体をデザインする。そんな思いを一層強くした今回の研修交流会でした。

第5志津川分科会　「あるものを有効に活かす」千徳　博［柳田村当目公民館］

全国各地で、ボランティア団体、市民活動、NPO、企業、行政などの活動主体がさまざまな地域作りを展開しています。私は高校3年生のときに、初めてボランティア活動をしました。曽々木海岸に付着した重油をとる、真冬の海岸ということもあり大変過酷なものでした。既に進路の決まっていた私は先生にいわれ渋々やることになったのですが、みなで協力し、少しずつキレイになっていく海岸を見たとき嫌だという気持ちも忘れ一生懸命やったという充実感に溢れていることに気づき、みんなで力を合わせることの素晴しさを知りました。もっといろんな活動を体験して新しい発見をしたい思いから今回この地域づくり団体全国研修交流会宮城大会に参加することにしました。

魅力ある各分科会の中で私は第5志津川分科会を選択し、その分科会では廃校になった校舎をグリーンツーリズム体験できる宿泊施設として利用している志津川町の見学、そして実際に漁業体験等をするというものでした。私の村でも、いくつかの小学校が統合し学校が廃校になった校舎があります。その校舎を今後どのように利活用していくかの参考になるのではと思いながら視察しました。

1日半の体験で感じたことは、志津川町の地域おこしは新しい物を作るのではなくあるものを有効に使い観光客の興味を惹かせる工夫していること・好きなことをやっている人は輝いていることでした。廃校になった小学校をなんとか残したいという町民の気持ちから小学校運営事業組合を立ち上げ、総事業費約4千2百万円で旧校舎をさんさん館という宿泊施設として開業、教室を洋室、和室にし、１人部屋の１室を1年1組・2人部屋の２室なら2年2組・6人部屋の１室なら6年1組と部屋名も何気ない工夫がありました。木造校舎特有の廊下や階段のギシギシという音に懐かしみを感じ、洗面所での歯磨き１つでも小学校時代の気持ちがよみがえってきました。社会人になって忘れかけていた当時の思い出・夢など新鮮な気持ちがその校舎や校庭を１歩あるくたびに甦ってくるようでした。観光地にとって大事なことはもう一度その地を訪れたいと思わせることだと私は考えているのですが、まさにさんさん館がそうでした。ただ学校という建物に宿泊するというだけでなく、地域にとってもっとも身近でそこを愛する人たちにもてなされ、グリーンツーリズム体験でその地域の生活に触れること、旅行の醍醐味が集約されているのがもう一度行きたいと思う大きな要因だと思います。

この視察研修を通し、莫大なお金をかけ新しくなにかを作るということだけではなく、あるものでそしてアイディア次第でこんなにも人を惹きつけることができるのだということを感じ、21世紀の地域の在り方を、地域おこしに対する考えかたを学んだように思います。

地域づくり交流

上山のひとびと
～山形県上山訪問記～

今年の「ゆふいん文化・記録映画祭」でお会いした「上山まちづくり塾」のみなさんを訪ねた。上山は、映画祭で鮮烈な印象を残した「満山紅柿」のロケ地で、映画の題材になった干し柿の国内有数の産地である。紅柿やさくらんぼのようにたわわに実をつけていくであろう様々な取り組み、それに関わるホットな人たちと出会うことができた。

■上山まちづくり塾

発足は2001年10月1日。塾長には、地域興しの実績のある志賀秀一氏を仙台から迎えている。『市民と職員が一緒にまちづくりを学習する講座を開催したり、意見を交換したり、まちづくりを実践するための交流の場』（上山まちづくりセンター http://www.kaminoyama-machisen.jp/）となっている。

さくらんぼ狩り

今回の定例会には52人の塾生中18名が参加。内女性5名。30～50代くらいの年齢層。今後20代10代の参加があるともっと刺激的な会になることだろう。蕎麦屋のご主人、福祉の仕事をされている方、温泉旅館の若女将、女性起業家、海外青年協力隊OBなどの多彩な顔ぶれが、そばを語る会をつくったり、商店街を花で飾ったり、まちの歴史を調べたり、おのおの取り組みをしている様子。浴衣で町を歩いてもらおうと、宿泊客に浴衣をプレゼントする企画も始まっていた。みなさん「上山を元気にしたい」という思いは共通している。豊富な人材の横のつながりが、新たな展開を生みそうである。市の担当の方々が本当に熱意を持って取り組んでいらした。市民側も決して受身ではない。民と官の協働がうまく軌道に乗っていってほしい。

こんにゃく番所 御主人

こんにゃく料理

斎藤茂吉記念館

この他にも、鮮烈な印象を残す“上山人”に出会えた。

■タケダワイナリー

http://www.takeda-wine.co.jp/

土壌作りからこだわり本格的なワインをつくっている、日本では稀有なワイナリー。
案内は3代目にあたる女性。内容にも語り口にもひきこまれる。ワイン作りにかける一家の情熱のなせる業か。本物を追及する取り組みは、地域の財産。ワインは雑味がなく美味であった。

■山川牧場

http://www.yamakawa-farm.com

農業体験を通じて命の尊さや自然の仕組みを実感してもらう目的で、子どもや学生などを受け入れており、「酪農教育ファーム」として認証されている。酪農と地域産業の関係、景観・環境保全・リサイクル型農業生産などを考えるプログラムも組み込まれている。敷地内には、自家産の牛乳、乳製品を販売する喫茶店も。牧場ライブやオリジナルソングのCD化など、取り組みは実に自由でユニーク。

上山滞在中、熊本県小国町の行政マン秋吉祥志さんを囲んでの座談会があり、お話を伺うことができた。まちづくりは「そこに暮らす人が楽しくいきいき生活できる空間を考えていくもの」との考えは、由布院の「生活者のためのまちづくり」と通じる。地域の「財産」を掘り起こし、自分たちに何ができるかを問いつづけ、外からの人・情報を受け入れる。実践者ならではの力強い言葉であった。

（小国町HP　http://www.town.oguni.kumamoto.jp/ognhtml/index.shtml）

特産の果物、温泉、豊かな自然、街道沿いの歴史遺産、斎藤茂吉のふるさと・・・上山独自の財産はたっぷり。それらをどう演出し磨き、生活の豊かさに結び付けていくのか楽しみである。次は雪の蔵王を眺めながら、旬の干し柿をいただく旅にしようか。

吉村 未紀子 [そい]

春雨庵

第16回自治体学会 ふくしま郡山大会

開催日◆平成14年8月22日(木)・23日(金)

開催場所◆福島県郡山市「ビッグパレットふくしま」

報告者◆**青海 康男**
特定非営利活動法人
いしかわ市民活動ネットワーキングセンター

まちづくりは地域固有の発展形態を抜きには語れない。市町村合併で1964年に誕生した郡山市は1997年に福島県初の「中核市」となり、駅前を中心とした「中心市街地活性化基本計画」に基づくまちづくりが進められている。セミナー「まちをデザインする」では、自治体としての先駆性が強調された。分科会10「NPO・自治体の協働モデルを考える」では、先駆的な6つの事例が紹介された。

岡山市が中心市街地の空き小学校を暫定活用するために、市民ボランティア団体に独立採算で管理運営を任した事例。その必要性を説得する担当部局が行政内部に向けて作成した書類の重みに対し、市民側がどこまで答えうるか、興味のつきない報告だった。

また、岡山市は独自で「特定非営利公益事業指定制度」をつくるなど、自治体とNPOとの、明文化されたパートナーシップの関係はとても説得力があった。

(特)鎌倉市市民活動センター運営会議はさらに進んでいて、平成10年には条例により、運営管理を鎌倉市から委託されている。平成13年の意識調査の結果、市職員の約半数近くが「NPOを知らない」ことを報告し、足元の認識不足を指摘した。新たな試みとしては、行政とNPOによる協働のガイドライン策定に向けて「協働研究会」を発足させるという。

いわてNPOフォーラムは、岩手県が1億円を出資し、年間1千万円、10年間に渡って取り崩して助成するファンド「公益信託いわてNPO基金」を取り扱っていることを報告。行政委託では難しい「人件費」「備品購入費」も認めさせ、団体のみならず個人への助成も可能にしている。銀行と業務を契約することによって、行政が直接委託する以上の可能性が開ける事例である。

静岡県生活文化部NPO推進室長は、自らNPO団体のメンバーとして、水辺自然環境の再生、改善事業に取り組み、来るべき行政リストラの時代に備え、就職できるNPOを育てることを熱く語った。

(特)NPO政策研究所からは、「コミュニティシンクタンク」の考え方を聞く事ができた。「地域の暗黙知にもとづく“物語”を顕在化させる」ことは、地域に根ざす具体的な活動のイメージづくりに大きなヒントとなった。

多様な事例で過食気味の時間を過ごした。二人のコーディネーターは、いずれも若い女性で、いよいよNPOも新しい時代に入ってきたと感じた。

【地域レポート】

新規参加団体紹介

1 こだわりもんの会［輪島市］

代表者●遠島 美知子（とおしま・みちこ）
連絡先●遠島 美知子 TEL:0768-22-0497
輪島市鳳至町鳳至丁121-9 〒928-0074

【設立目的及び活動内容】輪島市朝市で代々リヤカー屋台で鮮魚販売を行っている漁師の妻の皆さんが、観光ズレしていると感じる輪島市朝市の現状と未来を危惧し「本物」を販売するべく設立。輪島港で水揚げした新鮮な魚、自家製の漬物等、手作りのものにこだわって屋台に並べている。また、輪島市漁協の開発グループとも意見交換をしている。

輪島朝市

2 曽々木青年会［輪島市］

代表者●刀祢 昭和（とね・あきかず）
連絡先●刀祢 昭和 TEL:0768-23-0121
輪島市中段町机高34-甲 〒928-0041

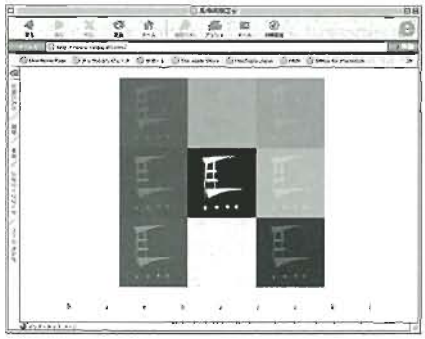
【設立目的及び活動内容】風光明媚な景観が続く、能登半島国定公園でも有数のポイント「輪島市曽々木海岸」の地域の若者の手での、地区の活性化を目的として設立。地元に密着した青年団として、海岸のゴミ掃除から、曽々木海藻祭り・曽々木寒中みそぎといったイベント主催・参加までの幅広い活動を行っている。

海草まつり

3 馬場崎商店会［輪島市］

代表者●笹谷 孝司（ささたに・こうじ）
連絡先●森谷 英一（もりたに・えいいち） TEL:0768-22-5650
輪島市河井町3部199番地の1 〒928-0001
URL:http://www.banbazaki.com/

【設立目的及び活動内容】商業の振興を図るために、ハード面だけでなく、ソフト面でも魅力ある街並み形成を行うために設立。まちづくり会議（いちいち会）を毎月開催したり、まちなかコンサートなどを行なっている。まちづくり会議には商店街の人だけでなく、それ以外からも参加。また、商店会の通りは、街並み整備事業として平成11年に建設大臣表彰を受けた。



4 能登麦屋おさよ会［輪島市］

代表者●沢田 正秀（さわだ・まさひで）
連絡先●森高 タツミ（もりたか・たつみ） TEL:0768-22-1055
輪島市水守町川フゴ13 大屋公民館 〒928-0022

【設立目的及び活動内容】能登麦屋節考演劇出演の折、輪島そーめんやおさよ伝説を調べたことがきっかけ。歴史の中から生まれた民謡を考え伝え、そして、明日の私たちの、そして、趣旨に賛同する人々の活力とすべく設立。老人施設への慰問、文化祭や商店街イベントでの発表、各種公民館活動への参加、土地の古老からの昔話の伝承、学習会、等を行なっている。

5 商都 Noto［能都町］

代表者●橋本 忠雄（はしもと・ただお）
連絡先●道下 秀司（みちした・しゅうじ） TEL:0768-62-2890
鳳至郡能都町字宇出津ト字44-4 〒927-0433

【設立目的及び活動内容】能都町中心市街地の整備改善及び商業の活性化を目的に設立。地域が抱える問題に商店街が積極的に関わり地域密着型サービスなどに取り組む。「お父さん出番ですよ」という事業では店主が講師となり、それぞれの仕事の技を活かした講座を開いている。プランターの花でお客様をおもてなししたり、貸し傘サービスを行なったりしている。

6 富来町商工会青年部［富来町］

代表者●寺岡 一彦（てらおか・かずひこ）
連絡先●浜野 誠一（はまの・せいいち） TEL:0767-42-2562
羽咋郡富来町地頭町甲137-2 〒925-0446
URL:http://www.ishikawashokokai.or.jp/togi/

【設立目的及び活動内容】地域内における商工業の総合的な改善発達を図るとともに、青年経営者としての資質の向上、福祉増進を目的に設立。地域振興の大きな原動力となるべく、「ジャンボバザール」や「ミニトライアスロン大会」などのイベント事業、クリーン作戦やチャリティーゴルフなどの奉仕福祉事業、研修事業などを実施。青年部会報、町内マップ付電話帳を発行。

地域づくりシンポジウム

7 さわやか「いいね金沢」河北支部［七塚町］

代表者●田渕 悦子（たぶち・えつこ）
連絡先●中野 啓子（なかの・けいこ） TEL:076-247-9117
金沢市横川4丁目153-1 〒921-8163
E-mail:iine-k@spacelan.ne.jp

【設立目的及び活動内容】高齢者、障害者、子どものいる家庭（世帯）等で困った事が起きた時、家事援助や託児などをして、その家庭にいる人が、自立したり、ストレスを感じることなく生活が送れるよう手助けをします。気軽に頼めるように有償でサービスを提供。家事援助（掃除洗濯、草取り、買い物等）、託児は1時間700円。ふれあいサロンは1回300円、小学生は100円。

「初めてのトールペインティング」参加者

8 元気だすまい会・NUT［七塚町］

代表者●西 茂（にし・しげる）
連絡先●坂野 嘉久（さかの・よしひさ） TEL:076-283-0624
河北郡七塚町白尾町ホ51番3 〒929-1177

【設立目的及び活動内容】日本海に育まれた豊かな自然環境の保全と心ふれあう地域社会の形成に寄与するため、七塚と宇ノ気、高松の3町の特性を活かしたまちづくりに加わり、自ら実践していくことを目的に設立。地域住民の交流活動、自然環境保全に関する調査・研究、伝統文化に関する調査・研究、広報活動、イベントの企画運営、地域特産物等の販売などを行います。

9 はづちを［加賀市］

代表者●永井 隆幸（ながい・たかゆき）
担当者●吉田 栄治（よしだ・えいじ） TEL:0761-77-8270
加賀市山代温泉18-59番地1 はづちを楽堂 〒922-0242
URL:http://w2272.nsk.ne.jp/~spa-crow/

【設立目的及び活動内容】世代や性別、個人、団体などを有機的に結びつけ、地域を活性化させることを目的に設立。加賀市と協働で公共施設「はづちを楽堂」の管理・運営をプランニング。この公共施設を利用して、高齢者交流活動・交流イベント・ギャラリー・インフォメーション・憩いの場づくり等を行う団体や個人と、共に活動したり、サポートしたりしている。

高齢者向けパソコン教室

地域づくり実践講座【曽々木編】

7月7日の午後、奇岩窓岩で知られる
輪島市曽々木海岸の曽々木振興センターで
実践講座が開かれた。
呼びかけ団体は、新しく県協議会に
入ってくれた曽々木青年会（青年団のこと）。
コーディネーターは、濱博一氏である。

物語性に溢れた曽々木に

当地には通称「接吻トンネル」がある。かつて銀幕のスターによる、当時は珍しいキスシーンの撮影が行われたところで、これが奥能登観光に火を付けたのである。押すな押すなと観光客が集まり、それぞれに自己体験？を得たかは定かではないが、好景気や流行歌の影響もあり、民宿街も随分と賑わったそうである。ところが現状はどうか。特に冬場は寂しい。名物の波の花に変わりはないが。

これではいけない。何とかならないか。何とかしたい。でも、どうすればいいのか、何から始めたらよいのか。みんな忙しいし・・・。というような問題意識でこの実践講座は開かれた。開いてみると、同じような気持ちがあったのか、長机を追加する盛況ぶりで50人もの参加者が集まった。

先ず、一般論として地域づくりの段階論である。曰く、6つの局面あり。予備軍（思いはあるけど）、きっかけ（一歩がだせない）、計画準備（一番楽しい時）、やってみる（無我夢中で）、反省と評価（慰めず冷静に）、本格的に（いよいよ）の6つである。

それぞれに思い当たることもあると思う。今は予備軍であっても卑下することはない、それは志を持つ時だ。しかし反省・評価は人情的にならずにきちっとする必要があるということも学んだ。ここで地域と都会のすれ違いという趣旨のお話があり、私は、地方での様々な投資が誘客の面でミスマッチとなっている実態について感慨深いものがあった。

この後、交流体験を経済にする仕組みの必要性や、地域づくりの継続性についてのポイント等について学び、いよいよ各論。ワークショップ方式で、地域の宝探し、それの具体的・プログラム化について作業を進めた。

みんな真剣に考え、発表した。素晴らしいアイデアの数々であったが、今はなぜか発表できない。そのうちアッと驚かしてやろうとか考えたりして～（笑い）。

有意義な一日であった。主幹団体の青年団のみなさんもやる気になっている。次の日程についても話し合われている。

都会と地域が相思相愛になり、交流する人々の自己願望を実現する、物語性に溢れた曽々木になって欲しいと思う。

コーディネーターの濱さん、参加者の皆さん、特に市外から参加して下さった、春蘭の里、平家の郷構想研究会、FMラジオで能登を一つにする会の皆さん、皆さんありがとうございました。

坂下 利久［輪島市役所総務部企画課］

編集後記

いもづる式にネットワークを広げる。由布院の文化・記録映画祭で出会った上山の人々を訪ねる。上山で出会った秋吉さんをたよりに小国町に行く。全国研修交流会では島根や上山の人々と再会する。さて次はどこでどなたに会えることやら。（高峰）

石川県地域づくり推進協議会 情報誌
MyPage
Vol.11 2002年11月発行

●発行
石川県地域づくり推進協議会
事務局／石川県総務部地方課振興係内
金沢市広坂2-1-1 〒920-8580
TEL076-223-9058 FAX076-223-9486
E-mail:chiiki1@pref.ishikawa.jp
URL http://www.pref.ishikawa.jp/tihou/